



日本海よりユーラシアへ

環日本海経済交流センター センター長 藤野 文悟

2013年の幕が開いた。2012年には世界で数多くの指導者が交替した。一方アメリカの財政の崖、欧州の金融不安など世界経済の先行きは不透明だ。日本も政権が民主党より再び自民党に戻り、アベノミックスは先行きの期待感より円安、株高と日本経済の復活を囁いている。一方尖閣を中心とする不穏な形勢は東アジアの不安定化を増幅している。日本はその地勢学的地位より環太平洋のTPP、日中韓を中心とするFTA、或いはRCEPなど何れに力点を置いて今後の運営を行うか、岐路に立たされている。

このような国際情勢のなかで環日本海をどの様に考えたらよいか。

世界は多様化に向かっていることに疑いの余地はない。超大国アメリカの影響力は漸次低下して行くだろう。EU、ユーロの結成と強化（イギリスの帰趨もあるが）、新興国の協調、G7よりG20へ、更に新たな極の編成が行われるだろう。その中心はアジア、ユーラシアにあると筆者は考えている。中国、ロシア、中央アジアを中心とし、更にイラン、インド、パキスタン、モンゴル等により結成されている上海協力機構がその中心だ。中国は東から西へ、更に中央アジアへ、ロシアは極東の開発を促進しロシア全土の総合的開発を目論む。朝鮮半島、ASEANはその大きな経済圏のなかに組み込まれて行く。

地勢学的に言って環日本海の時代が訪れるという予感がある。日本海から朝鮮半島、更に中国の東北地方、ランドブリッジを経て中央アジアへ、日本海からロシアの極東、更にシベリア鉄道を使ってユーラシア、欧州へと東部より西部へ、更に欧州へ至り、東アジアを巻き込む一大経済圏が形成され日本海が大きな動脈となると思われる。

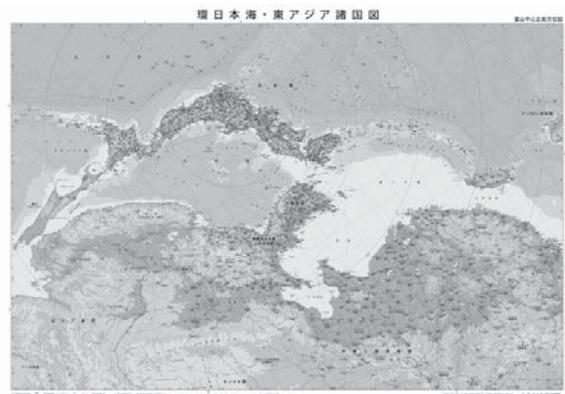
日本の政治は地方の分権と活性化を唱っているが、戦後の復興が圧倒的にアメリカに依存し太平洋を中心に形成されて来たため東京一極集中の現

状から抜けだせず、日本列島の改造も東京中心で進められて来た。しかし国際場裡では多極化が進み日本は表と裏と両方の顔を利用出来る状況となっている。本格的な多極化は国際的な多極化からスタートするのではないか。

ロシアの極東の発展（エネルギー、食糧など）朝鮮半島の近代化（北朝鮮の改革も何れ進む）、中国東北地方の発展、中国の内陸、内需への依存、そして広くは中央アジアの開発、ASEANとの協調等日本がデフレから脱却して海外展開を進める潜在力は日本海に存する事態が予測されるのである。

富山県は日本海を中心部に位置する一大工業都市である。富山県が中心となり、環日本海の近隣県市を包括し、日本列島の裏から表を攻める力を持つて逆さ地図の世界の実現の好機となるだろう。過去の日本の政治家で中央アジアへの日本の進出を説いたのは故橋本龍太郎首相であったと記憶する。

上海協力機構への参加は今、日本では誰も唱えてはいないが、オブザーバーとして参加しておく懐の深い外交力を持つこともよいのではないか。アメリカとの同盟があるから不可ということになるのだろうか。2013年の幕開けに描いた夢である。



環日本海・東アジア諸国図／通称「逆さ地図」
この地図は富山県が作成した地図（の一部）を転載したものである。（平成24情使第238号）